

2017年4月30日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉師

聖書：ヨナ1章

タイトル：『全世界を愛する主と未熟な預言者』

本日は、ヨナ書一章から『全世界を愛する主と未熟な預言者』と題し、次の3つに分けて考えたいと思います。①ヨナについて、②水夫について、③創造主なる神について

①ヨナについて。

1v「**アマタイの子ヨナに次のような主のことばがあった。**」

ヨナはアマタイの子でした。アマタイとは「忠実」という意味です。もし名前の通りであれば、ヨナの父は神に対して「忠実」な者であったのでしょうか。しかし実際のところは、どうであったのか…？とにかくヨナの父は「忠実」という名前であったことだけは確かです。ヨナはこの「忠実」という意味のアマタイから生まれました。そしてヨナとは「鳩」という意味です。

この「鳩」もまた聖書の中では神に対して非常に忠実な生き物として多く記されています。例えば、創世記のノアの洪水の後のところで、ノアが地上を探るために鳩を放って、飛ばしたことが記されていますが、そこでは、先に飛ばしたカラスは戻ってきませんでしたが、その後放した鳩はノアのところにちゃんと戻ってきました。それは飼い主であるノアに対して忠実だったということです(創8:9-11)。

新約聖書では、イエス様のバプテスマのときに、「**御霊が鳩のように下って(マタイ3:16)**」来た。という出来事がありました。そこにも神の恵みを忠実に運ぶものとして、鳩が表現されています。

このように鳩は、聖書の中で忠実な生き物として使われることが多くあります。また鳩はその飼い主に対して忠実であると同時に非常に素直でもあります。この忠実で素直というのが鳩の特徴です。

ですからヨナは、神に対して忠実で素直な信仰を持っていたということが、本質的には言えるのかもしれませんが。またアマタイが、自分の子に「ヨナ(鳩)」という名前を付けたことを考えると、アマタイの信仰がもう少し見えてくるような気がします。良い意味で考えるなら、神様を信じる信仰の継承が彼ら親子の内にあっただと言えるのかもしれませんが。

また1節の後半分節に記されている「**主のことばがあった。**」という表現は、旧約聖書の中でもよく目にする表現です。同じような言葉は、旧約聖書の中に110回ほど記されています。ですから、この言葉が記されている時は、一般的に預言者に対して主から語られる時の定型表現であることが分かります。

イザヤも、エレミヤも、ハガイ…などの預言者もみな、「**主のことばがあった。**」と記されています。

ヨナもまた預言者でした。そして実際にヨナが預言者である。ということが、Ⅱ列王 14:25にはっきりと記されています。

Ⅱ列王 14:25「**彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。それは、イスラエルの神、主が、そのしもべ、ガテ・ヘフェルの出の預言者アマタイの子ヨナを通して仰せられたことばのとおりであった。**」

ヨナは預言者であり、その出身はガテ・ヘフェルという町でした。このガテ・ヘフェルはナザレの町の北東約5キロにあった町です。ガリラヤ湖の近くの北のほうです。ヨナは、おそらくこの辺りの北地区を中心に活動していた預言者であったのでしょうか。そしてこの時代はちょうど、イスラエルが南北に分かれていた時代です。ヨナの居た北イスラエルの王は当時ヤロブアム2世が統治していました。Ⅱ列王 14:25

の前半に記されている、「彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。」というのは、まさに北イスラエルの王であるヤロブアム 2 世が統治したものです。レボ・ハマテからアラバの海までというのは、「イスラエル」の国が、まだ南北にも分かれていなかった、ソロモン時代の最も栄えていた王国以来の範囲であった。ということです。レボ(入口)・ハマテという北の方面を、北イスラエル王国が統治することは、ある程度理解出来ますが、アラバの海とは、死海よりも南のことです。ですから、ヤロブアム 2 世は、南ユダ王国のほとんどの場所を含めて統治していたということを意味します。第二列王 14 章にそれらの経緯が記されています。とにかく北イスラエル王国は、ヤロブアム 2 世を王として、力を持ち、この時もっとも繁栄している時でありました。

しかしヤロブアム 2 世がいかに力を持っていたとしても、周りには、さらに強力な敵国が幾つもありました。その一つに、アッシリヤ帝国があります。このアッシリヤとは今のイラクです。彼らがヨーロッパ地方やエジプト方面に行く場合は、必ずイスラエルを通ります。ですからイスラエルにとっては、このアッシリヤはいつも脅威を感じる国であました。こうした時代背景がヨナ書の背後にあったのです。

その預言者ヨナへの主の命令が 2 節の言葉です。

2 v 「**立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。**」

「**大きな町ニネベ**」とは、あの強力な敵国であったアッシリヤの首都のことです。主はヨナにその敵国の首都ニネベに「**行き**」と、お願いではなく、命令したのです。しかも「**行き**」の前に、「**立って**」と、主はおっしゃいました。「**立って**」というのは、「直ちに、そして意識してことを始めなさい」というニュアンスを含んだ命令を意味します。ですから、ただ「**行き**」とおっしゃただけではなく、「**立って、行き(け)!**」と、非常に強い命令であったことが分かります。そしてその理由が、「**彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。**」と主はおっしゃいました。

「**彼らの悪**」とは、アッシリヤの偶像礼拝と、その信仰からおよぶあらゆる不道徳な行いがあったことを指しています。彼らは、まことの神を神としないで、偶像をつくり、また自分たちの気の赴くままに勝手な行為を続け、その思いはいつも悪い方に傾き、非常に腐敗したものとなっていました。それはまことの神を無視する者の姿を記している。創世記 6:5「**主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。**」にある通りでした。

また、当時の偶像礼拝に関しては、旧約聖書を読むと、よくそのことが記されています。例えば、自分たちの子供達をいけにえとしてささげたり、また穀物などの収穫は、男の神と女の神の性的な結びつきによりもたらされるものと考えられていて、それゆえ彼らは、「高きところ」という場所を造っては、性的に淫らな行為を頻繁に行う様になっていました。そしてそれが社会全体に腐敗した不道徳な価値観を広めていたのであります。またニネベの町の歴史を見ていくと、創世記 10 章に、はじめてニネベという町が出てきます。そこには、地上で最初の権力者といわれたニムロデが建設したとあります。ニムロデの名前の意味は「私たちは反逆しよう」という意味です。明らかに、まことの神様に対して挑発している名前です。さらにニネベという名前の由来も、女神イシュタルの古代バビロニア語の「ニヌワ」がその由来であると言われていています。ですから、彼らには、どっぷりと異教の偶像礼拝の文化が根付いていたのであります。そうした歴史的なことから、ニネベは、非常に腐敗した都市となっていて、その悪がいよいよ「**神の前まで上ってきた**」というほど酷いものであったのだと想像できます。

まことの神の預言者であるヨナにしてみれば、『神の戒めを守らないアッシリヤとニネベの人々が、自分たちの不道德な行いゆえに、滅ぶのは当然である！』と思ったでしょう。また、この神の裁きにより、アッシリヤの国が衰退していくことは、『イスラエルにとって非常に良いことである！』と心から思ったはずですが。しかし主は、その不道德と悪に満ちた、イスラエルの敵国であるアッシリヤの首都ニネベの人々に対して、「**立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。**」と、悪をやめるように伝えることを、ヨナに命じたのです。ヨナとしては、このことは、あまりにも受け入れがたい、主の命令であり、そのお言葉でした。

これまでヨナは、主の預言者として、実に忠実に、また素直に神に従い、イスラエルの民を導いてきた者の一人です。ですから、なおのこと、このイスラエルの敵であるニネベの人々を助けるような命令は、とても理解できないことであり、従いたくない命令であったのは本当に理解できることです。

そうしたヨナの思いが、3節からの行動にはっきりと現れました。

3 v 「**しかしヨナは、主の御顔を避けてタルシシュへのがれようとし、立って、ヨッパに下った。彼は、タルシシュ行きの船を見つけ、船賃を払ってそれに乗る、主の御顔を避けて、みなといっしょにタルシシュへ行こうとした。**」

この3節には、神に対するヨナの特に反抗の思いが、凝縮されて記されています。この3節の中だけで「**主のみ顔を避けて**」という言葉が、2度も出てきます。10節にもう一度出てきますが、この1章だけで3回も、この同じ言葉が記されています。そしてそのうちの2回がこの3節の中に記されているのです。それほどヨナは、意図的に神に反抗しているということです。

そして「タルシシュ」という言葉も、この3節の中で3回も出てきます。ヨナは主の命令であるニネベとはまったく違うタルシシュへ向かおうとしました。またヨッパという場所も、地中海沿いの港町ですから、ニネベとは全く反対の方面に向かう船がそこにあったことが分かります。ヨナは、その中から「タルシシュ行きの船を見つけ」、とありますが、これは「**見つけ出して**」という意味です。そして船賃まで既に支払って、乗り込んだ！のです。明らかな反抗でした。タルシシュとは、一般的に南スペインのタルテススという場所であったであろうと言われております。ニネベとは全く反対の方向でありました。

こうしてヨナを乗せた船は、タルシシュを目指して出港したのですが、4節にある通りに、主は大風を海に吹きつけ、激しい暴風を起こしました。そしてそれはこの船が難破するほどの激しいものでありました。ヘブル語では、この「**大風**」、また「**激しい暴風**」とは、「**際立った**」という意味があります。それがこの4節の中だけで2度も続けて記されています。それほど凄まじい嵐であったということです。船は**その際立った大きな暴風の中に巻き込まれ、本当に危機的な状況に追い込まれたのです。**

それゆえ5節のあるように、水夫たちは自分の神に向かって叫び、船を軽くしようと、荷物を海に投げ捨てたのであります。この時、水夫たちが叫んだ「**自分の神**」とは、明らかに「**異教の神**」のことです。イスラエルの神のことではありません。ヨナは、この激しい嵐の中、こともあろうか、船底に下りて行き、横になり、ぐっすり寝込んだのです。これは眠かったというよりも、徹底して神に反抗する態度を表していたのではないのでしょうか。

さて、そんなヨナに、6節「**船長が近づいてきて彼に言った。」「いったいどうしたことか。寝込んだりして。起きて、あなたの神にお願いしなさい。あるいは、神が私たちに心を留めてくださって、私たちは滅びないですむかもしれない。」**と言いました。

この船長が言った言葉の「**起きて、お願いしなさい**」という言葉は、ヘブル語では、実は2節の、主がヨ

ナに「**立って、叫べ**」とおっしゃった言葉と同じ言葉です。10節の後半に記されている、「**人々は、彼が主の御顔を避けてのがれようとしていることを知っていた。ヨナが先に、これを彼らに告げていたからである。**」とあるように、船長たちは、嵐が起こるよりも前に、ヨナが神に敵対し、反抗していることをすでに聞いていた！ということです。ですから船長はあえてここで、同じ言葉を選んで使ったのではないだろうかと考えられます。

ヨナはこの激しい嵐の中、船長のこの言葉で気付くことが出来たと思います。いや、気付けたと思います。あるいは、それよりも前に、自分の乗った船が嵐に巻き込まれたすぐその時に、主の言葉に従わない者は神の裁きに遭う！ということ、預言者ならば誰よりもそのことを知っていたはず、そして神の裁きがどれほど恐ろしいものであるか！ということも、預言者の彼は十分、分かっていたはず、ですから、この嵐に遭ったすぐその時に、また船長の言葉からも、ヨナは神の裁きに気付くことが出来たのです。しかしそれでも、ヨナの心は頑なになっていて、神の命令をととも受け入れることが出来なかったのであります!!それどころか、彼は、ますます反抗的な態度になり、12節にあるように、「**私を捕らえて、海に投げ込みなさい。そうすれば、海はあなたがたのために静かになるでしょう。わかっています。この激しい暴風は、私のためにあなたがたを襲ったのです。**」と、自分の不信仰への神のさばきを受け入れ、そしてその裁きの中に自らを投げ入れよと、言葉を発したのです。

ヨナは、徹底的に神に反抗したのです。忠実で、また素直であるはずの預言者ヨナが、いまや不信仰な者となり、不従順で、神に対して不満を爆発させる者となってしまったのです。ヨナは、神様よりも自分の信仰と自分の正義を正しいとしたのです。

確かに神は不従順で不信仰なものを裁かれます。それはまさに今、ヨナが体験している通りでしょう。ならば、なぜ、不信仰で不道德なニネベの人々にそれが及ばないのか！という不満が、ヨナの中には取り去ることが出来ない怒りとなって溢れているのです!!だから神に反抗し、批判し、敵対し、神よりも自分の正義を正当化したのであります。

このヨナの大きな間違いというのが、まさに私たちの心の中にも確かにあるのではないのでしょうか。全てを導いてくださる神を認めず、神が定め、また神が備えてくださったことを時に否定します。

そうして、『あの人がいなければいいのに』と思ったり、または反対に『この人だったらいいのに』ということもあるかもしれません。あるいは『こういう事情ならやります。』などと言ってみたり、さらには、自分の考えがいかに正しいかを神に訴え出て、『神様、そうでしょう。そうに決まっています。だってこうじゃないですか。…』などと、神を教えようとさえします。私たちは本当に、自分の間違った正しさを主張することが、実に多いのではないだろうかと思います。日常の色々な事の中に、『神を認め、従順に歩んでいるのか?』ということが問われています。そして私たちは本当にいつまでたってもそれがなかなかできない、未熟な者です。未熟な預言者ヨナの姿そのものです。ですから、自分は未熟であるということをおぼえ、知っているならば、私たちは主の前に謙虚になって、へりくだることが出来ます。しかし、自分があたかもなすべきことを知っているかのように思い、信仰の道を正しく歩んでいると過信しているならば、その時は大きな間違いを犯す危険が及んでいる！ということ、私たちは覚えておく必要があるのではないのでしょうか。ヨナはまさしくそのような未熟な預言者であったのです。

②水夫について。

水夫は、これら一連の出来事を通して、ヨナの信じているまことの神様を心から認めるようになってい

ます。はじめは5節にあったように、「自分の神(偶像の異教の神々)に向かって叫ぶ」者たちでありましたが、最後には14、16節にあるように、「主に願い、主を恐れ、主にいけにえを捧げ、そして主に誓願を立てる」ほどになりました。驚くべき変化です。

一方、人々をまことの神に導くはずの信仰者であり、しかも預言者であったヨナは、決して良い証を立ててはいませんでした。信じている神を無視する不信仰な行いは、水夫たちにとっては、むしろ大きなつまずきだったはずで、そしてヨナはそのような信仰の態度であったと言えます。

けれども水夫たちは、ヨナのそうした不信仰な態度に左右されずに、目の前の出来事の中に、まことの神を知ることが出来たのです。

水夫たちはプロの船乗りです。船に乗ることが彼らの日常の仕事です。これまでも幾多の嵐を経験してきたことでしょう。しかし、この度のすさまじい嵐の出来事は、自分たちの命が本当に危険にさらされ、切実にそして真剣に祈りをささげなければならない!という出来事でした。さらに、船賃をいただいた客であるヨナを、およそ助かる見込みのない荒れ狂う海の中に投げ入れなければならなくなったのです。彼らにとっては、あまりにも悩み多い出来事となったのです。その多くの悩みと切実で真剣に救いを求める叫びや祈りが、まさに本当の神を求める信仰へと彼らを導いた!と言えるのではないのでしょうか。人がまことの神を信じ、信仰に入るといえるのは、まさにこの水夫たちのように、切実で真剣な時です。今、信じなくともよい、いつかまた後で、そのうち…、という人は、このことがどれほど大切であるのかが分かりません。ですから先延ばしにしても痛くもない痒くもないことです。まことの神を信じることは、それほど大切なことでもなければ、切実なことでもなければ、真剣なことでもありません。

私たち信仰者は、この切実に思っていない、滅びに向かっていく霊的盲目の人々に、何としてでもこのことを呼び掛けなければならないのです!!場合によっては、神様に嵐を起こしていただく必要があるかもしれません。そして信仰者は、どんな時も恐れてはならないんです。たとえどんなにひどい嵐に見舞われたとしても、私たちが信じるまことの神は、そこから必ず救い出して下さる!ということ、私たちが確信をもって伝えるんです。

水夫たちは、この大きな嵐のなかで、真剣な祈りと切実な思いと心からの救いを求め、まことの神を知ったのです。

③創造主なる神について。

何より創造主なる神は、全世界を創られたお方です。そのお造りになったすべての上に、100%の御計画と余すことのない愛を注いでおられます。なぜなら、主は、完璧、完全なるお方であるがゆえ、あるものには50%、あることには90%の力ということが、決してできないお方だからです。主が創造したどんなものでも、そこには全く手抜きがありません。100%の御愛と御計画がそのものすべての上にあります。

しかし、これほどまでに素晴らしい主の御愛と御計画があるにもかかわらず、この主を裏切って、滅びに向かう者たちが残念ながらいます。けれども主は、そうした滅びに向かうような者たちがいたとしても、愛することを決しておやめになりません。

それがまさに、このヨナ書1章2節の言葉なのです。

「**立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。**」

これはニネベの町が、あのニムロデから始まった神の御愛に背を向けて、悪の行いに満ちた町であろうが、それをさばくための宣言ではなく、むしろ「彼らが悪を辞めるように警告を与えなさい！」という、預言者ヨナに命じられた主の言葉でありました。また、全世界を創造された神の御愛がどれほど深く大きなものであるか！ということ、ニネベの人々にも、そしてヨナ自身にも、主は知って欲しかったのです。この2節の言葉まさに、悪への悔い改めと主のあわれみに満ちた言葉であったのです。

その大きな主の御愛を、未熟な預言者ヨナは、わからなかったのです。ヨナはじめ、有限の存在である私たち人間は、無限の神のあまりに大きな御愛をなかなか理解できません。そしてその神の御愛がどれほど広く、長く、高く、そして深く、また豊かであるのかを私たちは解らずに、いつも神様を自分の考えの中で小さくしてしまいます。そして悪人さえも愛する気前のいい主を、私たちはヨナのように時に非難し、自分の頭の中に押し込めてしまいます。

しかし神は、お造りになったすべての者が悔い改めて、神を愛し、正しく生きていくようになるために、決して諦めません。その究極が、イエス様の十字架です。イエス様は、私たちを救うために、御自身の命をも投げ出されるまことの愛のお方です。私たちは、このイエス様にあって、いつでも主の御元へ戻ることが赦されています。本当に驚くべき恵みです!!

しかしそれなのに、私たちはこの驚くべき神の御愛と恵みを簡単に忘れ、日々見失ってしまい、未熟な預言者ヨナのように高ぶります。だからこそ、この2節の「**立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。**」の御声の中に隠されている、全てを愛し、全ての上に御計画を持っておられる創造主なる神のゆるがない御愛と御計画を見つめ、受け止め、今週も歩ませていただきたいと思うのです。

これが、『全世界を愛する主と未熟な預言者ヨナ』ということであり、またヨナ、水夫、創造主なる神について、それぞれ見えてくる聖書の教えではないでしょうか…。

最後に、神の御思いを本当によく表している御言葉を読んで終わりたいと思います。

エゼキエル 18 : 23、31 - 32

18:23 わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。——神である主の御告げ——彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。

18:31 あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。

18:32 わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。——神である主の御告げ——だから、悔い改めて、生きよ。

主のどこまでも深い御愛が私たちの上にあるのです。アーメン。